《論文》

5、6世紀ころの紀伊水門について、歴史地理的一考察

今　井　俊　夫

「紀伊水門（きのみなと）」は、5世紀ころまでに紀氏の治める和歌山の紀ノ川河口に設営され、ヤマト政権の外港として重要な役割を担った。『古事記』の「神武東征」に語られた紀国「男之水門（おのみなと）」は、和歌山市有田屋町に在り紀伊水門の一角を占めたと仮定すると、紀伊水門の中心部に男之水門・国懸（くにかかす）神宮・竈山（かまやま）神社・矢宮（やのみや）神社の四地点を角とする矩形の「結界」が現れる。その対角線の交点は、古代の大宅郷が置かれていた和歌山市手平にあたる。手平は紀伊水門結界の中心「神籬（ひもろぎ）」といえる。それら五社は更に、元伊勢の濱宮（はまのみや）に集まる。濱宮の真北に「鳴滝遺跡（5世紀前半の大規模倉庫群）」が在り、手平は正に濱宮と鳴滝遺跡の間を二分した位置に在る。鳴滝遺跡から更に軸線を北へ延長すると大阪府岬町淡輪に至る。濱宮・手平・鳴滝遺跡・淡輪（医王寺跡付近）は南北軸（レイライン）上に等間隔に並ぶ。鳴滝遺跡の位置に意味があり、淡輪も紀伊水門の機関に属し紀氏と深い関係があることを見いだした。濱宮、車駕之古址（しゃかのこし）古墳、弘西（名草池南側）を頂点とする三角形は紀伊水門を俯瞰した広域な結界といえる。

1．はじめに

和歌山は、記紀神話の舞台の一つになり、日本古代史の中でも注目される出来事が散見される。このころの出来事は、史実といえないものも少なくない。しかし、丁寧に紐解けば、その中に事実といえそうな部分が見え隠れする。

『日本書紀』によると、5、6世紀ころの紀ノ川河口に「紀伊水門（きのみなと）」というヤマト政権の外港があり、仲哀天皇や神功皇后が滞在した。紀伊水門は紀伊の水軍の本拠地であり、ヤマト政権の国内統一、朝鮮出兵のための機能を果たしたとされる[1)]。紀伊水門には、記紀神話に語られる古代の一大スペクタクルが存在していた。

本稿では、記紀等の歴史的文献及び考古学の成果を参考に、地域の伝承や社寺・史跡などの古い遺構の位置関係に着目し、地図上に古代「和歌山」の空間を浮き上がらせる歴史地理的考察を試みたい。

2．和歌山市の歴史環境について

和歌山市は、紀ノ川の最下流に位置し、紀ノ川に抱かれ発展してきた。和歌山市の歴史は古く、紀ノ川河口付近に鳴神貝塚や禰宜貝塚などの遺跡が発見され、縄文時代にすでに人が住んでいた形跡が認められる。ＪＲ和歌山駅東側にある太田黒田遺跡は、弥生時代前期から中期に

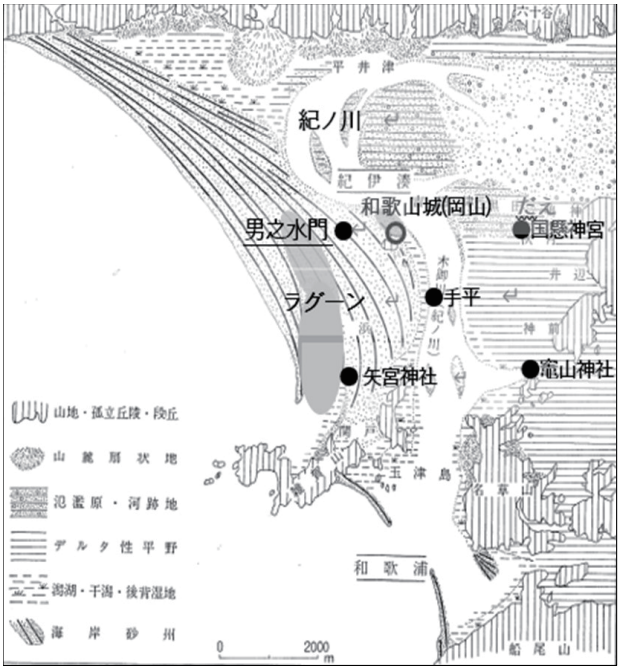
かけての大規模な集落跡である。発掘調査により竪穴住居・井戸などの集落域や水田などの生産域に関わる遺構、土坑墓・土器棺などの埋葬施設が確認された。弥生時代前期には既に比較的大きな集落が形成され、稲作が行われていたことが明らかになった。1970年に太田黒田遺跡の中心部にて、内部に「石舌（音を鳴らすための棒）」が付いた状態で銅鐸が出土し、全国的にも話題になった。

古墳時代中期（５世紀前半）以降には紀ノ川北岸の車駕之古址（しゃかのこし）古墳、大谷古墳、釜山古墳をはじめ、南岸の岩橋千塚古墳群などたくさんの古墳が造られた。その営みは地方豪族の紀氏によるものであった。紀氏は、奈良盆地南部に基盤を築き全国統一を進め、朝鮮にも遠征したヤマト政権と深い関係があることが明らかになっている。

５、６世紀ころの歴史・民俗についての文献記録は、８世紀に書かれた古事記、日本書紀を待たなければならない。その内容にはフィクションも含まれており、事実かどうかは慎重な判断が求められる。一方、考古学の分野においては、古墳、史跡等の発掘調査が地道に続けられており、前述の古墳や古代の倉庫跡と考えられる「鳴滝遺跡」などの史蹟発掘成果を踏まえ、研究が徐々に進んでいる。

３．古代の紀ノ川と「紀伊水門」

４～６世紀ころの和歌山市、特に、紀ノ川の河口付近（以下「古代和歌山」という。）を地理的に考察する。日下雅義氏の研究によると、紀ノ川は、現在の河道と異なり、北側山裾の河岸段丘寄りを東から西に流れ、和歌山市土入付近で行く先を砂丘に妨げられ、南に向きを変え土入川から和歌川の河道に入り、さらに南に流れて、名草から和歌浦付近にて海に注いでいた[2)]。



日下雅義氏作成元図[2)] に加筆

図１　５、６世紀頃の紀ノ川河口周辺地形環境

紀ノ川の西側には、和歌山独特の緑泥片岩（青石）等が隆起した小高い岩山が連なる。北から、和歌山城（岡山）、秋葉山、奠供山（てんぐさん）、鏡山、妹背山等がある。若山（和歌山城）・岡山から秋葉山の西側（雄湊、砂山、吹上、高松、今福、関戸北部の各地区周辺）は、広範囲に海砂が堆積し、砂丘化した微高地になっている（図３）。この微高地の西側は急に落ち込み、水軒川が北から南に流れ養翠園付近で海に注ぐ。水軒川の河道付近は、南に開かれたラグーン（潟）を形成していた（図１）。

３世紀後半ころに奈良盆地に興ったヤマト政権は、瀬戸内海の覇権を握っていた。内陸部の

奈良盆地から瀬戸内海に出るには、まず紀ノ川を河船で下り、河口で「外洋船」に乗り換え目的地に向かうのが合理的であった。そのため、遅くとも５世紀ころまでに、紀ノ川河口に開かれた「紀伊水門（きのみなと）」は、ヤマト政権の外港として重要な役割を担った。仲哀天皇・神宮皇后紀の熊襲征討や雄略天皇、宣化天皇、欽明天皇期等に十数回に及ぶの朝鮮出兵の際に軍港として機能した。

４.「男之水門（おのみなと）」の伝承

古代和歌山は、古事記、日本書紀に記述されている「神武東征」神話の舞台にもなった。古事記によると、ヤマトを目指す神武天皇一行は、浪速(なみはや)の渡りを遡り、河内国日下に着いたものの、長髄彦の抵抗に遭い、彦五瀬命（神武天皇の兄）が手に矢を受けて負傷し敗走した。大阪湾の南部、和泉国の「茅渟（ちぬ）の海」を経てたどり着いたのが紀国の「男之水門（おのみなと）」であった。そこで彦五瀬命が、「ああ、卑しい奴により手に傷を負って死ぬのか。」と男建（おたけび）して亡くなったので、この地名になり、その墓は紀国の竈山にあるという。

原文を書き下す。『其地（茅渟の海）より廻り幸でまして、紀國の男之水門に到りて詔りたまはく、「賤しき奴が手を負ひてや死なむ」と男誥びして崩りましき。故、その水門を号けて男水門と謂ふ。陵は紀国の竈山にあり。』

古事記による紀国「男之水門」の比定地は、和歌山市小野町の「水門吹上（みなとふきあげ）神社」といわれる。一方、日本書紀では「男之水門」は「雄水門」と表記され、紀国ではなく、「茅渟山城水門」（和泉国）で雄建びして亡くなったことになっている。山城水門は、大阪府泉南市男里にある男神社の摂社「浜の宮」に比定される。「男之水門（雄水門）」は紀国か和泉国か、定まっていない。

５．紀伊水門「結界」の仮定

紀伊水門は、紀ノ川河口の一か所にあったわけではない。恐らく秋葉山や和歌山城がある若山（岡山）、太田黒田遺跡や鳴神貝塚がある紀ノ川左岸の西から北にかけて又は北側山裾など、複数に船溜まりがあったと推察される。紀伊水門を想像しながら地図を見ていた時に、ふと気が付いた。『紀伊水門の中心部に結界が存在するのではないか。』

和歌山市秋月にある「日前宮」は、彦五瀬命が葬られたという伝承地に建つ「竈山神社」の方に向かって建つ。日前宮、竈山神社と秋葉山、和歌山城を繋ぐとほぼ正方形になる。なんとなく、地図から読み取れる道もその正方形に沿っているではないか（図２）。

日前宮は日前（ひのくま）神宮と国懸（くにかかす）神宮の二社が東西に並び、詳しく見ると、東側の国懸神宮が竈山神社に正対している。竈山神社から西へ国懸神宮と竈山神社を結ぶ線と直角を取るとほぼ秋葉山頂を通り、さらに西に行くと矢宮神社に当たる。今度は国懸神宮から西へ直角を取るとほぼ和歌山城の二つの峰（天守閣と本丸跡）を通る。矢宮神社を南始点に竈山神社と国懸神宮を結ぶ線と平行移動すると綺麗な矩形ができる。その北西の角は、雄湊（おのみなと）小学校【2017年閉校】付近に当たる。国懸神宮・竈山神社・矢宮神社はいずれも神武東征と関わりがある。そうすると、この角（交点）が「男之水門」ではないか。古代和歌山

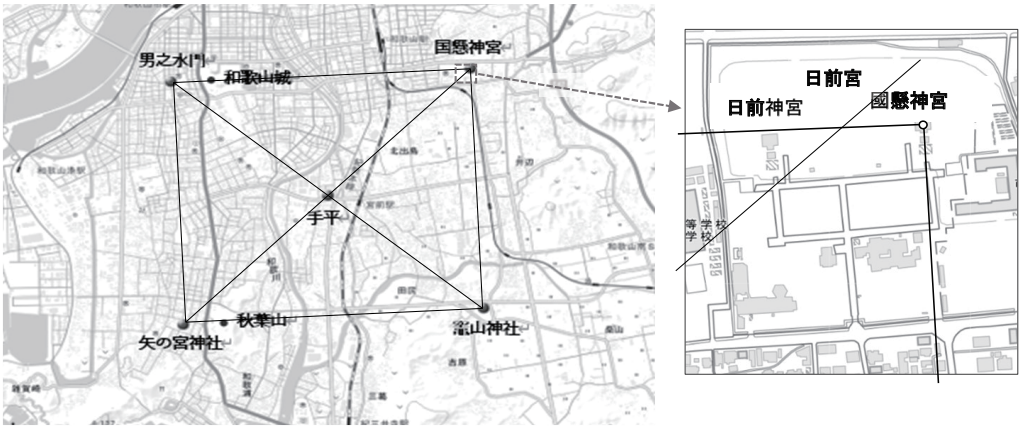


図２　紀伊水門中心部の結界・日前宮境内詳細図

に、国懸神宮・竈山神社・矢宮神社・男之水門を各角とする矩形の結界が存在したのではないか。あくまでも推論であるが、歴史地理的に特に違和感はない。

・日前宮は、和歌山市秋月にあり、日本で最も古い神社のひとつといわれ、日前（ひのくま）神宮と国懸神宮（くにかかす）の二社からなる。日前神宮には「日像鏡(ひがたのかがみ)」を御神体として日前大神を奉祀し、國懸神宮には「日矛鏡(ひぼこのかがみ)」を御神体として國懸大神を奉祀している。二つの鏡は、伊勢神宮に祀られている三種の神器の一つ「八咫鏡（やたのかがみ）」に先立って鋳造られたといわれる。日前神宮、国懸神宮及び伊勢神宮の三社は、他の神社と一線を画して別格の宮に位置づけられる。日像鏡と日矛鏡は、神武東征の際に帯同されたといわれ、秋月に祀られる前には和歌山市毛見の濱宮（はまのみや）に置かれていた。濱宮は、豊鍬入姫（とよすきいりひめ）命が八咫鏡を祀る鎮座地を求めて一時「元伊勢」仮宮を置いた場所であり、三鏡が並び安置されていたことになる。

・竈山神社は、神武天皇の兄彦五瀬命が葬られた地（和歌山市和田）に建つ。本殿の背後には彦五瀬命の墓と伝わる「竈山墓」（古墳）がある。

・矢宮神社は、和歌山市関戸にあり、熊野において神武天皇一行を先導した「八咫烏（やたがらす）」（現代でも日本サッカーの守護神として馴染みが深い）を祀る。伝承によれば、神武東征において賀茂建角身（かもたけつぬみ）命が当地に陣を構えて、日本書紀に記述されている名草戸畔（なぐさとべ）を誅（殺）したという説がある。推古天皇の代に賀茂建角身命の後裔の「矢田部氏」が当地に祖を祀ったことから矢宮神社になったと伝えられている。日本書紀によると、兄を葬った神武天皇一行は、竈山を出航し、紀伊の熊野で再上陸後、さらに丹敷戸畔（にしきとべ）を誅し、深山幽谷をヤマトへ進む。その時、神武天皇一行をヤマトに導いた鳥の神が「八咫烏」であり、賀茂建角身命と同一とされる。

さらに、矩形の対角線交点は、和歌山市手平に位置する。平安時代の漢和辞書「和名類聚抄」によると、手平は奈良時代の名草郡「大宅（おおやけ）郷」に比定されている。大宅とは、６、７世紀ころにみられたヤマト政権直轄の領有地（屯倉（みやけ））である。交点は正しくその比定地にあった。手平は、古代和歌山にとって最も神聖な場所の一つであったと想察される。

４、５世紀ころの手平周辺は、恐らく川の中であった。想像を膨らませると、その場所は紀伊水門を出航する船を修祓し、天佑神助を与える結界の中心『神籬（ひもろぎ）』に当たるのではないか。この地は、結界の北東角、国懸神宮の西隣に祀られている日前神宮の日前大神が

坐す場所に他ならない。神籬を北東（丑寅）の結界内に移すことはあり得る。日前神宮と国懸神宮はほぼ東西に並んで建っているが、日前神宮がやや南に寄っており、北西の結界内に収まっていることになる。

手平は江戸時代に「手の平村」と訓読みされていた時期があり、まさしく日前神宮、国懸神宮、竈山神社、矢宮神社及び男之水門の五指が手の平で一つになるイメージと思われる。
手平の大宅郷比定地の近くには、真言宗の寺院光福寺がある。

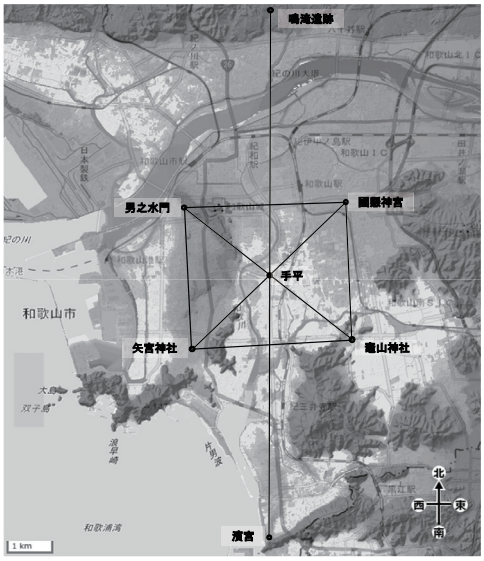
手平は「宮前」小学校区になる。手平付近に神社がないのに何故「宮前」なのか。手平が神籬であれば説明できる。

以上、「男之水門」位置の仮定から出発した紀伊水門の結界は、国懸神宮、竈山神社、矢宮神社及び男之水門の神武東征に由来する四つの史跡が矩形の各角に配置され、中央（対角線交点）に手平が配置される整った形が現れた。

紀伊水門の「結界」は、古代の人々が拘った四神相応(しじんそうおう)の地に当てはまる。つまり、北の玄武は和泉山脈、東の青龍は紀ノ川と龍門山、南の朱雀は和歌浦の干潟と熊野・矢宮神社の八咫烏に対応する。西の白虎は南海道に符合する。国懸神宮、竈山神社、矢宮神社及び男之水門の各所は玄武、青龍、朱雀、白虎に対応している。日前宮の北の太田黒田遺跡の黒田の地名も玄武に由来し、男之水門東側の和歌山城（岡山）を虎伏山と称するのも西の白虎から引用されたかもしれない。

6．男之水門の考察「徳川頼宣公のしごと」

本論で仮定した紀伊水門「結界」の北西角を担う「男之水門」推定地は、和歌山市有田屋町付近にあたる。従来の男之水門の比定地の一である和歌山市小野町の水門吹上神社から北に500mほどの至近距離にある。このあたりは、海砂が広範囲に堆積した微高地の西北端に位置する。国土地理院の地図によると、標高は７ｍほどあり、周辺の微高地の中で最も高い。周辺の微高地の範囲は、和歌山城や秋葉山の西側にある雄湊、砂山、吹上、高松、今福、関戸北部の各地区で、標高は４ｍ～６ｍほどである。「男之水門」推定地の西側及び北側は急に落ち込む。西側には前述のラグーンが形成され水門として機能していたと思われる（図１）。ここは、紀ノ川本流とは別の水路（ラグーン）にあることが特徴であり、紀ノ川本流にある紀伊水門を補完する水門の機能を有していたのではないだろうか（図３）。



（標高2m以上グレー色 淡⇨濃 標高が上がる　水面は除く）
図３　男之水門標高図

本論の男之水門推定地には現在、真言宗寺院である光明院が建っているが、江戸時代は、紀州藩初代藩主の徳川頼宣（1602-1671）が隠居する際に屋敷を構えた地であった。頼宣はここで亡くなり、その後光明院に譲与されている。光明院は、紀州徳川家の祈祷所であり、頼宣の施策に関わっていたことも考えられる。光明院の東

隣（和歌山市東坂ノ上丁＝旧雄湊小学校地）は、「紀伊続風土記」（1839年完成）の編纂に当たった仁井田好古（1770-1848）が屋敷を構えていた。徳川頼宣、仁井田好古らは、この地が「男之水門」であったことを認識していたのではないか･･･。

古代和歌山の史跡は、紀ノ川の氾濫等自然災害及び中世の織田信長、豊臣秀吉による紀州攻めにより、甚大な被害を受け、史料等の多くが消失した。その後1619年に紀州に入城した徳川頼宣は、施政にあたり日前宮、濱宮、矢宮神社、竈山神社、岡の宮、玉津島神社、紀三井寺（名草山）、根来寺など荒廃した歴史に於いて重要な社寺や史跡を復興している。頼宣は、古代～中世和歌山の歴史を研究し、施政に取り入れた可能性がある。頼宣は、高野山、根来寺など真言宗との関係、天台宗僧侶天海との関係があり、施政や都市計画に影響を受けている。

頼宣は、古代和歌山の紀伊水門の結界を認識しており、結界に関係する神社、史跡の復興を行ったが、あえて、日本書紀に無視された紀国の「男之水門」は復興せず、自らは「男之水門」に隠居したのではないだろうか。

７．紀伊水門の南北軸（レイライン）について

和歌山市南端の毛見に濱宮が鎮座する。濱宮の歴史は古く、「国造家旧記」等の古文書記録により、次のように伝えられている。

『神武東征のとき、神鏡及び日矛を天道根命に託し、琴ノ浦海中の岩上に奉祀した。濱宮の起源といわれる。崇神天皇51年に、崇神天皇の子、豊鋤入姫命が天照皇大神の御霊代を奉戴して名草濱宮に遷座せられ、同時に琴ノ浦の岩上に安置されていた天懸（日前）大神・国懸大神も濱宮に遷し、宮殿を並べて鎮座せられた（奈久佐浜宮）。その後、崇神天皇54年に、天照皇大神は吉備名方濱宮に遷られ、その後も転遷したあと垂仁天皇の代に伊勢に遷しられ現在に至る（伊勢神宮）。一方、天懸・国懸両大神は、垂仁天皇16年に名草萬代宮（現在の日前宮）に遷られ、常宮として鎮座せられた。

その由緒により、当神社の第一殿に天照皇大神、第二殿に天懸大神・国懸大神が奉祀されており、「元伊勢の大神」と称えられる。』

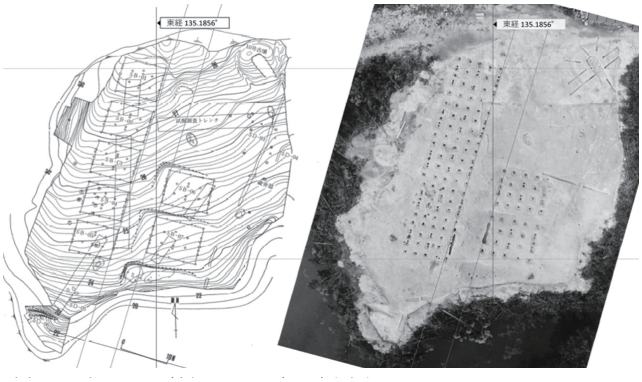
上記のように、伊勢神宮元宮（元伊勢）の一つ「奈久佐浜宮（なぐさのはまのみや）」に比定される濱宮には、現在日前神宮・国懸神宮に祀られているご神鏡の日像鏡・日矛鏡が、両神宮が建立される前に暫く安置されていた。古代和歌山におけるヤマト政権の足がかりの地といえる。濱宮の境内に五つの丸い石が祀られている（写真１）。

写真１　濱宮境内の不思議な五つの丸い石

この五つの石は、日前神宮・国懸神宮・竈山神社・矢宮神社・男之水門の五社の象徴であり、濱宮は五社が集まる焦点といえないか。濱宮の本殿は東を向いているが、鳥居は北を向いており、鳥居のすぐ内側に五つの丸い石がある。濱宮の東に位置する伊勢神宮からの神力を濱宮が受け取り、北に位置する五社に放っているのではないだろうか。濱宮は先に述べた紀伊水門の結界を完成させるため必要

不可欠な「装置」ではないだろうか。

濱宮から手平は真北に位置する（東経135.1856°）。濱宮から手平を通る南北軸（レイライン）を北に延長すると和歌山市善明寺の「鳴滝遺跡」にあたる。（図４）鳴滝遺跡は、1982年に鳴滝団地北西の大池のほとりで発見された５世紀前半から中ころの大規模倉庫群である。発掘現場から多数の柱跡と大量の須恵器片が発掘され、一辺が７～10mもの大型掘立柱建物が計７棟、２列に密集し整然と立ち並んでいたと推定される。須恵器片は朝鮮伝来とみられる初期須恵器の大甕であった。建物群は、物資等の貯蔵施設であったことが推察される[3)]。



濱宮からの真北ライン（東経135.1856°）は鳴滝遺跡を通る
和歌山県教育委員会　鳴滝遺跡発掘調査概報 p.10 元図・写真に加筆

図４　鳴滝遺跡

濱宮、手平、鳴滝遺跡は南北軸（レイライン）上にあるだけではなく、正確に等間隔に位置する。手平は、濱宮～鳴滝遺跡間の中心にあたる。鳴滝遺跡は、紀伊水門の広域の結界として重要な役割を担っているのではないか。

８．鳴滝遺跡

鳴滝遺跡の倉庫には単に食料の備蓄だけではなく、武器や宝物など、遠征に必要不可欠な貴重な物品が保管されていたと考えられる。御神酒を作っていた可能性もある。鳴滝遺跡がなぜ此の地にあるか、発見後から議論が続いてきたが、機能面とは別に、紀伊水門の南北軸（レイライン）に拘ることが明らかになった。

鳴滝遺跡の南東に接する鳴滝団地は、元々泉福山という小高い丘陵地であった。宅地造成がはじまった1965年に発掘調査が行われた。急ごしらえで不十分な調査であったが、五基の古墳が検出され、丘陵全体が群集墳であることが確認された。古墳群は鳴滝古墳群と名付けられた。しかし、古墳以外に住居跡の有無等は詳しく調査されていない。その報告書によると、今回指摘された濱宮・手平・鳴滝遺跡を通る南北軸上に第５号墳が認められた。その北側には地元の人々が古くから大切に祀る小祠があり、「その祠にふれるとたたりがある」と伝わり恐れられていたことが記載されている[4)]。地元には紀伊水門の結界に関する何らかの伝承があったのではないか。

鳴滝団地から、南を見ると、紀ノ川が一望でき、和歌山城や秋葉山、手平近傍の街並みが遠望できる。古代和歌山においても旧泉福山から紀伊水門が一望でき、作戦司令部として恰好の立地ではなかったか。泉福山にはヤマト政権の主要機関があったのではないか。その後背地に鳴滝遺跡が立地する。泉福山の南に「船所」地区がある。手平から鳴滝遺跡の南北軸線上に位置する。地名から、水門に関する役所か造船関係の機関があったのではないか想像できる。

鳴滝遺跡、鳴滝団地は和歌山市善明寺に立地するが、「善明寺」の地名は、古くに同名の真言宗寺院があったことに由来する。

９．淡輪

鳴滝遺跡から真北に南北軸線（レイライン）を延長すると、和歌山市に北接する大阪府岬町淡輪に至る。紀伊水門の結界が和泉山脈を跨ぎ、淡輪にも水門があったと考えられる。

淡輪は、和泉山脈から北に流れる番川の谷あいから扇状地、下流の平野にかけて古くから開けた地域で、旧石器時代及び縄文時代から人が住んだ形跡があり、弥生時代及び古墳時代の住居跡が認められる[5]（淡輪遺跡）。

淡輪には西稜古墳や淡輪ニサンザイ古墳、西小山古墳等の古墳が点在する。これらの古墳に施工されている埴輪は、円輪状の突起がある台上で整形されたため底辺部全周に特徴的な窪みがあるこの地独特の「淡輪技法」と呼ばれる土器技法を用いる。淡輪技法の埴輪は、和泉山脈を越えた南側の和歌山市の古墳にも多く見られることから、従来から淡輪と紀氏に関係性があるのではないかといわれていた[6]。

紀ノ川河口の便宜及び防備を考慮すると和泉山脈北側の淡輪を陣地にするのが合理的である。鳴滝･六十谷から和泉山脈を越え淡輪まで、徒歩で半日程度で行ける。大阪湾（番川河口）に紀伊水門の出先を置くことで住吉津、難波津、明石海峡ルートの航路を確保しやすくなる。鳴門海峡ルートとの補完ができる。淡輪は、早くから紀氏の影響下にあり、紀氏及びヤマト政権の機関があった可能性が高い。

鳴滝遺跡から真北に、手平～鳴滝遺跡間の距離を取ると、淡輪別所にある医王寺城跡から医王寺跡付近にあたる。濱宮､手平､鳴滝遺跡､医王寺（城）跡は､南北軸に等間隔で並ぶ（図５）。

医王寺城跡は、狭い平野に突き出した大阪湾を見下ろす尾根上にある。医王寺城は、江戸時代に常陸の土浦藩の番屋であった（淡輪は土浦藩の飛び地にあたり、藩主土屋政直は江戸幕府の老中を務めた）。医王寺城は、真言宗の一派である根来寺の出城であったともいわれる。大阪湾から淡路島を望む見張り台として最適である。いずれも５世紀ころの紀氏に関連する遺構の上に建てられた可能性がある。

医王寺城のふもとの番川沿いに開けた僅かな地部分に医王寺跡がある。医王寺は、平安時代の寺院遺跡であるが、医王寺跡の遺跡調査によると空海の京都における拠点である東寺と同様の軒瓦が出土したことから真言宗寺院の可能性がある[7) 8)]。出土品には須恵器が含まれていた。詳細は不明であるが、医王寺が平安時代以前の何らかの遺構の上に建立された可能性がある。

濱宮・手平・鳴滝遺跡・淡輪医王寺城跡が南北軸に等間隔に一直線に並んでいる

図５　紀伊水門の南北軸

10. 紀氏と大伴氏

前述のように、紀伊水門は、地方豪族の紀氏によることが分かっており、奈良盆地南部に基盤を築き全国統一を進め、朝鮮にも遠征したヤマト政権との関係が深い。本論で明らかになった紀伊水門は従来の想定よりはるかに大規模であり、地方豪族の紀氏の主体運営というよりはヤマト政権の運営と考える方が合理的である。

紀氏には紀直（きのあたい）と紀朝臣（きのあそん）の二系統がある。二つに分かれたのは6世紀後半から7世紀前半ころといわれる。紀直は、地方豪族のままの紀氏であり、紀伊国造（きのくにのみやつこ）を務め、日前国縣神宮を祭祀している。岩瀬千塚に祭祀されているのは紀直の方である。紀直は紀ノ川の南岸と東部を主に活動し、日前国懸神宮や岩瀬千塚を管理し、多くの地元民を駆り出すことができたのではないだろうか。一方、紀朝臣は、武内宿禰（紀角宿禰）を祖とし、ヤマト政権の中央に活躍の場所を移した。紀朝臣は、中央のヤマト政権と連携し、全体を指揮する役割であったのではないだろうか。紀直は、ロジスティックや水手（かこ＝水夫）を担当して、主に紀伊水門の東部を拠点とし、紀朝臣は紀伊水門全体を見渡し、淡輪も配下に押さえる紀伊水門北部に陣取り、北部の土地を支配していたのではないだろうか。従って、紀ノ川北岸の車駕之古址古墳、大谷古墳、釜山古墳は紀朝臣系の古墳ではないだろうか。同じ紀氏でも中央と地方の両方で活躍していたからこそ、両紀氏で紀伊水門が運営出来たのではないかと想像する[9) 10)]。

和歌山城の南東側の岡山の地（和歌山市片岡町）に刺田比古（さすたひこ）神社がある。別名「岡の宮」といわれ、祭神は道臣命を祀る。道臣命は、神武東征の際に熊野で先鋒を務め、八咫烏の後を追い武功を上げた。神武天皇即位の際には宮門の警衛を務めた。大伴氏の祖先神である。大伴氏はヤマト政権に於いて、宮廷を警護し軍部を担う。並んで、大伴佐比古命（狭手彦命）を祀る。佐比古命は、朝鮮に出兵し百済救済の武功（562年ころ）により、道臣命の出身地といわれるこの岡の里の地を授かったという。岡の宮近辺は、それ以前から大伴氏の駐屯地としての用途があったのかもしれない。1932年に、境内で古墳時代後期（6世紀ころ）の「岡の里古墳」が発見された。埋葬者は大伴氏との関係が考えられる。岡山は和歌山城から秋葉山にかけてひと続きの岩山の間にあり、秋葉山の西側に矢宮神社がある。矢宮神社は前述の紀伊水門結界の一角（南西）を占め、軍神の八咫烏を祀る。道臣命とも関係が深い。大伴氏はヤマト政権のトップとして派遣され、紀伊水門の西部に陣取り、若山、岡山、秋葉山、男之水門を掌握して精鋭部隊を派遣していたのではないだろうか。

11. 広域の結界について

濱宮から矢宮神社へ至る線を北西に延長すると和歌山市木ノ本にある車駕之古址（しゃかのこし）古墳に至る。車駕之古址古墳は、5世紀第Ⅱ四半世紀ころに造られた紀北では最も大きい前方後円墳で、紀北では珍しく平地に構築された。日本では初めて金製の勾玉が出土した。前項で述べたように紀ノ川北部を紀朝臣が押さえていたと推察されるので、紀朝臣関係の古代和歌山の重要人物が埋葬されている可能性がある。

車駕之古址古墳と鳴滝遺跡は関連性があると推察されることから、車駕之古址古墳と鳴滝遺跡を結び、更に軸線を東に延長すると、大谷古墳などの和泉山脈南麓に位置する古墳群の多く

はこの軸線のすぐ南側に位置する。

次に、濱宮から竈山神社を結ぶ軸線を北東に延長し、車駕之古址古墳から鳴滝遺跡を結ぶ軸線を延長して交わる点が名草池南側の弘西になる。弘西付近は、弥生時代の集落遺跡である弘西遺跡及び西の丘陵上には弥生時代後期の「高地性集落」の橘谷遺跡がある。名草池の歴史については不案内であるが、５世紀ころにすでに溜め池があり、集落や水田等、古くから地域拠点があった可能性がある。新たな史跡等が見つかる可能性もある（図６）。

濱宮・車駕之古址古墳・弘西の各頂点を結ぶ三角形の内部

図６　紀伊水門の広域結界

概ね古代和歌山は、濱宮、車駕之古址古墳、弘西の３点を頂点とする三角形の内部に開けていた。この三角形は、紀伊水門の「広域の結界」といえるのではないか。神功皇后を祀る玉津島（奠供山）、名草山、仲哀天皇の仮宮と熊襲征討の出港地である徳勒津（ところつ）宮、宇治神社もその３辺上に位置する。紀伊国府はその東南辺のすぐ内側に位置する。紀朝臣関係の古墳は、殆どが広域の結界の内側に入る。しかし、紀直関係の岩瀬千塚古墳群は、東南辺の結界の外側に位置し、車駕之古址古墳和泉山脈南麓の古墳群とは一線を画している。

12. 小括

本論では、紀伊水門の全体像を推察し、中心の結界と広域の結界が存在し、鳴滝遺跡の位置と用途の意味及び大阪府岬町淡輪と紀氏の関係を紐解くヒントを明らかにした。各論として、以下のことが具体的に推察されることを指摘した。

①. 国懸神宮、竈山神社、矢宮神社、及び②で述べる男之水門を四頂点とする矩形の結界が存在する。その対角線の交点が手平である。手平は、結界の中心、神籬にあたると考えられる。そこは、４、５世紀ころは恐らく川の中であり、出航する船に修祓し神力を得る場所であった。この場所は、本来は国懸神宮の西隣に祀られる日前神宮の鎮座する場所に他ならないと推察されることを指摘した。手平は、７世紀ころから陸地になりヤマト政権直轄の大宅郷（屯倉）と比定されている（図２）。

②. 古事記に記載された「男之水門」は、①の結界の位置関係を考慮すると、従来の比定地の

一つである和歌山市小野町の水門吹上神社の近く、和歌山市有田屋町の光明院付近の可能性があることを指摘した。

③. 濱宮境内には不思議な丸い五つの石がある。それらは、日前神宮・国懸神宮・竈山神社・矢宮神社・男之水門の象徴であり、各社が集まる焦点といえる可能性があることを指摘した。さらに、濱宮から手平、鳴滝遺跡及び④で述べる淡輪（医王寺城跡）が、正確に真北に等間隔に一直線上に並んでいることを指摘した。

④. 鳴滝遺跡の位置は、濱宮の真北に位置し、紀伊水門の結界として重要な位置に立地する。鳴滝遺跡がなぜ此の地にあるか、機能面とは別の理由が明らかになった。

⑤. 和歌山市に北接する大阪府岬町淡輪には、淡輪ニサンザイ古墳、西稜古墳等の巨大古墳を有し、今まで淡輪と紀氏の関係性が推察されていた。本論では、淡輪は、濱宮の真北の軸線上に位置し、和泉山脈を跨ぎまさに紀氏の領域であり、大阪湾に面する紀伊水門の一部として重要な位置に立地することを明らかにした。紀伊水門の結界の一つが、淡輪の医王寺城跡付近にある可能性を指摘した（図４）。

⑥. 古代和歌山は、概ね濱宮、車駕之古址古墳、名草池（弘西遺跡近辺）の３点を頂点とする三角形の内部に開けていた。紀伊国府もその中にある（図５）。

⑦. 徳川頼宣は、施政にあたり古代和歌山の歴史民俗を調べ、古代和歌山の紀伊水門の結界を認識していたと推察される。そこで、結界に関係する神社、史跡の復興を行い、自らは「男之水門」に隠居したのではないだろうか。

⑧. 男之水門、手平、鳴滝遺跡（古墳）、淡輪医王寺跡には真言宗寺院（跡）があり、真言宗では早くから紀伊水門に関心があったのではないか。

以下、表１に参考として、国土地理院標準地図（電子国土Web）から本稿で取り上げた各所の位置情報（経度・緯度）を読み取った値を示す。

表１　各所の位置情報（経度・緯度）

	場　　所	緯度（北緯_°）	経度（東経_°）
0	日前神宮	34.228889	135.201300
1	國懸神宮	34.229022	135.202786
2	竈山神社（墓）	34.201056	135.204450
3	矢宮神社（杜）	34.199150	135.167022
4	男之水門【仮定地】	34.226592	135.165315
4’	光明院	34.227486	135.165525
5	濱宮	34.161078	135.185603
6	手平【名草群大宅郷比定地】	34.214272	135.185158
6’	同〈1·2·3·4対角線交点〉	34.214722	135.185278
7	鳴滝遺跡	34.267272	135.185600
8	医王寺城跡	34.321928	135.187036
9	医王寺跡	34.321056	135.183806
10	車駕之古址古墳	34.262967	135.134653
11	弘西	34.271758	135.239817

13. おわりに

和歌山市の歴史的遺産の一つに和歌浦の風景がある。玉津島神社背後の奠供山(てんぐやま)に上ると、和歌川河口が一望でき、万人の琴線に触れる。

『和歌ノ浦に潮満ち来れば、潟をなみ、葦辺をさして、鶴鳴き渡る』　この和歌は、724年（神亀元年）に聖武天皇が和歌浦に行幸した際に、随行した山部赤人が詠った壮大な叙景詩であり、万葉集（巻６・919）に収められている。意味は、文字通り「和歌ノ浦に潮がさして来ると、だんだん干潟がなくなるので、葦の繁っている岸をさして、鶴が鳴きつれて、ずっと飛んでくる。」と解される。和歌浦・片男波あたりを俯瞰した風景を詠んだ歌意に異論はない。

しかし、本論で述べた古代紀伊水門の事情を憶うと、筆者には別の風景が見える。「和歌ノ浦に潮が満ちてくると、(軍船団が）肩を並べ、葦の国（淡路島南あわじ）を目指す。そのとき、朱雀（鶴）の聲が響き渡る。」･･･という戦に臨む意味の叙事詩に思えてならない。手漕ぎ船で和歌浦から鳴門海峡を抜け瀬戸内海に入り吉備に向うのは、難波津から明石海峡を経て吉備に向かうより明らかに近い。５世紀ころの紀伊水門は、初期ヤマト政権の本拠地（奈良盆地南東部）から瀬戸内を通り九州や朝鮮に向かう最短のルートであった。

本稿は、故薗田香融先生に私淑し、構想を得た。本論は、特に思想、信条にこだわりはなく、古代和歌山の歴史・民俗をできるだけ客観的に紐解き、和歌山の未来に役立てて戴きたいと思い執筆した。拙論の批評を広く戴き、古代和歌山の研究が進むことを期待したい。

引用文献

１）坪井清足、岸俊男編『古代の日本第５巻近畿』, 薗田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」角川書店, 1970, p.115

２）安藤精一編『和歌山の研究 第一巻 地質･考古編』, 日下雅義「紀伊湊と吹上浜」清文堂出版, 1979, p.58

３）和歌山市教育委員会「和歌山市善明寺付近鳴滝遺跡発掘調査概報」和歌山市教育委員会, 1983, p.5

４）京都大学文学部 考古学研究部「和歌山県文化材学術調査報告 第２冊」1967, p.37

５）岬町教育委員会「鴻ノ巣山１号古墳発掘調査報告書-泉南郡岬町所在」1977, p.2

６）大阪府教育委員会「泉南郡岬町所在淡輪遺跡発掘調査概要・Ⅳ ―宇度墓古墳外堤部・淡輪遺跡―」1982, p.7

７）摂河泉地域史研究会「大阪府泉南郡岬町淡輪別所中世墓地実測調査報告」1995, p.32

８）「岬町の歴史」編さん委員会『岬町の歴史』1995, p.40

９）寺西貞弘『日本古代氏族研究叢書② 紀氏の研究 －紀伊国造と古代国家の展開』雄山閣, 2013, p.1

10）栄原永遠男『紀伊古代史研究』思文閣出版 2004, p.8

参考文献

(1) 和歌山市立博物館「研究紀要　７」, 1992

(2) 森　浩一編「日本の古代 列島の地域文化」中央公論社, 1995

(3) 坪井清足、平野邦雄 監、山中一郎 狩野久編『新版古代の日本 第5巻 近畿Ⅰ』角川書店, 1992 雄山閣, 2013
(4) 安藤精一編『和歌山の研究 第1巻 地質・考古篇』清文堂出版, 1979
(5) 安藤精一編『和歌山の研究 第2巻 古代・中世・近世篇』清文堂出版, 1978
(6) 和歌山市役所編『和歌山市要』3版, 1939
(7) 和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史　原始・古代』1994
(8) 仁井田好古編「紀伊続風土記 第1輯 提綱 若山 名草 海部 那賀」歴史図書社, 1970